図書館通信 —65—

1983. 10

館長に就任して

大月卓郎

このたび細井先生の後をうけて、附属図書館長の大役をお引き受けすることになりました。全く予期していなかった上本館の事情に不案内のため、五里霧中の感じで、勉強を始めたばかりのところです。したがって、新任の抱負をという図書館通信編集委員会からの注文に困惑していますが、今回の就任について、図書館業務電算化との関連で、工学部の人なら計算機に対するアレルギーがないだろうという話がでていたようですので、これについての感想で代用させていただくことにします。

私が初めて電子計算機に接したのは、もう25年も前のことです。いわゆる第1世代の計算機で、回路素子は真空管、主記憶装置は磁気ドラム、その記憶容量2,000語、プログラムはもちろん機械語（厳密にはアセンブラ語）といった今からみればおもちゃのようなものでした。それでも手計算で半年かかった結果がわずか数分で出てくるのは驚きでした。以来無味乾燥で誤りやすい数値計算はすべて計算機に任せることにしています。アレルギーはないということになります。しかし計算機も使われ方によっては、かなり抵抗を感ずることがあります。例えば、クレジットカードとかキャシュカード等です。持ち歩けない程の大金に縁がないせいでしょうか？　計算機による音の合成、自動演奏、作曲もその1つです。カードに対する感覚的な抵抗感とちがって、このばあいは科学的な理由が考えられます。ここで詳しく述べるわけにはいきませんが、音楽の素材となる音だけをとってみても、合成音と人間の作る音との間には本質的な違いがあります。「楽器と演奏者を1つのシステムとみたとき、これ程精緻なサーボ系（フィードバックのある自動制御系）はない。」ある音響学者の言葉です。この系の制御中枢はもちろん演奏者の脳（特に右脳）であり、演奏者の健康状態、楽器の調子はもちろんホールの音響特性や聴衆の熱気にまで鋭敏に反応しながら、曲の要求する音を作り出していきます。演奏、作曲のばあいを含めて、結局人間の脳と計算機との差ということになります。そして今のところ、この比較は無意味のように思われます。

しかしこのような個人的な好悪とは無関係に、計算機はますます広い分野で利用されるようになるでしょう。特に計算機による情報処理および情報伝達技術の進歩は、いわゆる高度情報化社会の実現が間近に迫っていることを示しています。この状況はよく第2の産業革命と呼ばれることがあります。産業革命（熱エネルギーの機械的エネルギーへの変換）に始まり、核エネルギーの解放にいたる技術革新が主としてエネルギー中心であったのに対し、それとは異質の情報が主役になっているからでしょう。いずれにせよ、加速度のついた科学技術は、これまでと同ように社会の構造、様相を大きく変えながら、果てしない自己増殖を続けていくように思われます。それは、アダムとイヴが禁断の実を口にして以来、ギリシャ神話でいえば、知性と技術の神プロメテウスが天上の火を盗んで以来の人類の宿命というべきなのでしょうか。プロメテウスから火と技術を授かった人類はそれ以前より快適な生活を送ることができるようになりましたが、その代償として、パンドラの箱に入っていたあらゆる災いに悩まされることになります。

さて、情報革命の波は大学の附属図書館にも当然押し寄せてきています。特に、昭和55年学術審

もくじ

利用して頂ける図書館に……2
〈私のすすめたい本〉
人の子の親となる人達へ……3
読書環境を拡大せよ……4
〈図書館利用ガイドコーナー　5〉
図書館資料の受入れについて……5

議会からの答申「今後における学術情報システムの在り方について」が出されて以来、各大学の具体的な動きが活発になり、その1部は図書館通信に紹介されています。静岡大学では、細井前館長の御努力により、情報検索システムの導入、図書館関係諸規則の改正、図書館業務電算化委員会の設置等の措置がとられています。しかし、いくつかの大学では全学的に対応策を検討し、総合情報処理センターという形で研究、教育における利用はもちろん、図書館を含めた事務関係の業務全般をも処理できる計算機の導入に踏み切っています。本学においてもこれまでのような図書館単独の対応でよいのかどうかは、図書館業務電算化委員会の検討課題となるでしょう。

図書館にはこの他、歴代館長の引継事項として、図書館運営および図書館予算に関する基本問題があります。変革の時期を迎えてこれらの問題の再検討が必要になるかも知れません。若輩の私にどれ程のことができるか不安ですが、よろしく御指導、御支援下さいますようお願い申し上げます。

利用して頂ける図書館に

浜松分館長　**藤　田　郁　夫**

これまで図書館というものについては、常に利用する立場にありましたが、此の度、思いも掛けず利用していただく立場の大任を仰せ付かりました。あたかも、リレー競技を観戦中に突然バトンを渡され、コースに引き出された感があります。図書館というものを勉強しながら、浜松分館をより充実したものにして行きたいと思っております。

分館は歴代の分館長はじめ教職員の皆様そして卒業生等関係各位の御尽力により、新築に続く増築および雑誌の集中化が行われ、図書館としての内容と環境が着々と整備されてまいりました。殊に今回の増築により、一段と明るくゆとりのある空間を感じさせるようになりました。新設部分の二階に当たる学術雑誌エリアを中心にした一角は、西部キャンパスの中でも特に居心地の良い場所の一つではないでしょうか。図書館まで足を運びさえすれば、それなりの雰囲気もあり、広い分野にわたって利用し易い集中開架方式のメリットを十分に感じ取ることができます。しばしば分館を利用している一人としても嬉しく思っております。以前にも増してこのエリアで過ごす時間が長くなりそうです。

利用時間に関しては、数年前からの延長開館によって、できる限りの便宜が計られてまいりました。その後、雑誌の集中化が行われましたが、研究上必要な雑誌類を常時参照できるようにということで、磁気カードによる自動入館システムを導入して、7月下旬から時間外開館を実施しております。また、視聴覚室も授業、学会、講演会などと幅広く利用されているようです。その他情報検索室（JOIS, DIALOG)、セミナー室なども利用できます。

このように分館の機能は向上し、利用条件も改善されてまいりました。しかし、利用者から見ればまだまだ多くの要求がある筈です。図書館は利用されてはじめてその存在に意味があります。そのためには図書館の機能が利用者の要求に対応できるものでなければなりません。研究、教育、学習等それぞれの目的により、図書館の持つべき機能への要求は多様でしょう。例えば、総合的な情報検索が容易に行えて、他の図書館の資料でも迅速にコピーを入手できること、図書館の事務能率を向上させること、教育に必要な視聴覚資料が豊富に備えられていて、何時でも使用できること等々……。とりわけ、大学図書館の全国的な相互利用制度により、拠点大学における外国雑誌の集中的な購入が進めば、情報検索と資料入手のための時間短縮などは急務となるでしょう。

大学図書館は時代に応じてその在り方が問われ、新しい機能が要求され、その内容や利用の様態が変化していきます。山積する問題のどれを採っても、人員が少なく、経費の相当部分を潤沢とは程遠い研究費から捻出しているという、大学図書館全体が置かれている相変わらずの苦しい実情に行き当たります。このような情況の下では簡単に解決できない問題が多いようですが、分館としても常に重点目標の選択を迫られ改善もされてまいりました。今後も、より望ましい図書館へ向けての努力を続けなければならないと思います。皆様の御指導と御協力をお願いしながら、浜松分館が〝利用できる図書館〟であり、〝利用して頂ける図書館〟として発展できる方向を共に探りたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

（工学部・応用物理）

〈私のすすめたい本・47〉

人の子の親となる人達へ

小　島　義　夫

人間も哺乳動物の一種であり、有性生殖を営み雌雄の対合によって子孫が得られることは誰もが知っていることであろう。しかし、私達日本人は特別な医学系の教育を受けた人達を除き、真向から己の再生産にまつわる人間の生殖生理学や人体解剖学を学習する機会に恵まれていないのが現状であろう。我が国の歴史の上からみても、この基本的な問題は東洋思想の一貫としてタブー視されてきた傾向がある。常日頃、生物学は先ず人体を採り上げ、義務教育課程で自分自身を知ることが必要である、と考えている私は、生殖にかかわる教育の内容が植物の雌しべや花粉の働き、あるいは蝶や蜻蛉の交尾行動等に置き代えられて素通りして了うことに不満を抱いてきている。この種の問題について周囲を見渡してみても、優れた案内書や解説書は極めて乏しいと思われる。マスコミが興味本位にとり上げ、週刊誌等が繰り返しセンセーショナルに特集を組むセックスのテーマも、只いたずらに未知な若者の皮層面での好奇心をそそり、無責任な露出傾向に流れて了っている。このような情況の中に存る現代の若者達は、四十代以上の人達より恵まれていると言いきれるだろうか？

そんな状態の中で、講談社から『*生まれる＝胎児成長の記録』が訳本として出版された。この本は1965年にスウェーデンで『Ett Barn Blir Till』という題名で出版されたが、翌1966年に英文版が『The Everyday Miracle : A child is born』と訳されて出版された。受精から胎児の発育過程を美しいカラー写真とイラストで構成し、人の発生を科学的に示した名著と評価され、世界の十数カ国語に飜訳されている。1975年には、科学写真家のL. Nilsson他3名だった著者が4名となり、改訂版を出して更に充実した内容となった（訳本は改訂後の英訳に基づいている）。内容は両親の生殖器の解説に始まり、配偶子の出会いから受精卵の出来る迄を走査電顕写真を組み合せてマクロの世界を拡大して見せてくれる。胎芽期から胎児の形態形成にかけては各段階を追って素晴らしいカラー写真で図示し乍ら母体の衛生管理や注意事項を記載している。超拡角レンズによる羊膜内胎児の状態をダイナミックにとらえている写真は圧巻である。巧みに組み入れてあるイラストは読者の理解を助ける上に役立っている。最後に分娩から新生児の取扱い迄、写真を添えて丁寧に初めてのお産の為の案内がつけてある。訳者は母子衛生に造詣の深い松山栄吉氏で、本文159頁、定価2,900円の美しい本である。1972年に私はストックホルムで原著を入手し辞書を片手に読み始めたが、間もなく英訳にありつき通読して大いに感動した。この種の記録写真は実験動物や大型家畜でも非常に難しい技術を要するのに、よく人体で収録し得たものだと賞賛し、未だ追従する類書を見ていない。近い将来、人の子の親となる学生諸君に是非一読を推めたい本である。

多少硬い本としては学生向のH. Walter著『*人間生物学――性とからだの発達――』（原著はSexual-und Entwicklungsbiologie des Menschen : 1978）もよく出来た構成である。人体生物学や人類学の研究者である著者は、人間の受精から発育、出生から老化に至る迄、性病や遺伝を含めた広範な領域にわたって明快な解説をしている。サイエンス社の発行でB 6版、302頁、定価2,000円も手頃で、巻末に引用文献が載っているのも好ましい。

活字に食傷気味の方には三保文化ランドにある東海大学の人体科学博物館へじっくりと一日遊びに出かけることを推める。そこでは模型やパネル等によって人体を学習する為の多くの展示がなされているし、人間の生殖にかかわる受精現象や出産シーンがカラーTVで放映されている。正に「百聞は一見にしかず」であって、余計な配慮もなく真正面から性についての勉強が出来る。更に、同館では成人病や老化等の問題についてパンフレットが売られているが、中の一冊「性教育読本」も成人向に平易にまとめられている。CMも入っているが産婦人科学担当の塩塚幸彦氏の筆で、避妊や性病についてもふれてあり、100円は安い。

兎に角、我々は我々自身について知らな過ぎるのではないだろうか？　一寸した怪我や事故に際して対処する応急手当一つにしても、多少の人体生理学や解剖学の知識があれば大いに違ったものになり得る筈である。あらゆる学問や研究が人間とは何か？　人間の未来はどうなるのか？　といった疑問を解き明したくて推められていると信ずるが故に、その人間の出生機序にもっともっと興味を抱き、貪欲に勉強して望しい、と願う。

何時とはなしに人並みに結婚して、気がついたら神様の授りもので子供が出来て了っていて……といった流れにあきたらず、しっかりと自覚した健全な存り方を望む若い人達に、内容の充実した本を読んで望しいと願っています。

（農学部・家畜繁殖）

（＊印は本館所蔵を示す）

読書環境を拡大せよ

橋　爪　裕　司

読書には環境が大切である。これには誰しも異存はあるまい。しかし読書に適した環境とは何か。これには即答は難しい。読書とその環境は本来ごく個性的な条件のもとに、結合されるものと考えられるからである。その変わった例を挙げよう。

近年日本の家庭には、経済成長と子供の数の減少が同時に進行した結果、「貧乏者の子沢山」の逆現象が生じた。親というものは子供のために生きて行く動物のようなものだから、子供一人にかけられる教育投資が増せば増すほど、自分が豊かになったように思う。中学生時代から使って来た自分の机を子供にあてがうような甲斐性なしの親は別として、平均的な親は、小銭がたまれば子供に新品の机を買ってやり、子供部屋・勉強部屋を確保するためのマイホーム作りに血眼になる。こうして日本の子供達の教育水準は、世界に無比のものとなった。このような子供が大人になれば、当然のことながら読書のために書斎が必要となる。それも冷暖房完備、防音壁に囲まれていて、必要に応じてカクテルも作れれば夜食のサービスもOKという程のものかもしれぬ。「そうでなければ読書はまっぴら」と開きなおる若者の姿が、さぼおる・浜田屋・栄養軒へと群がり出て、片手に箸、片手に漫画の無言の行者と化した、と見るのがうがちすぎであれば幸いである。それはともかく、飲食店というのも一つの読書環境であると見るべきである。静大周辺の飲食店に哲学書・自然科学書がとりそろえてあってもいいではないか。またそれによって客足が増すことを示すべきではないか。デカルト・カント・ショーペンハウエルと浜田屋のおやじの顔が重なるのも、あながち不自然だとは思わない。問題なのは食べることと読むことを平行させて生理的な不都合がないかという点にある。しかし少なくともTVを凝視しながらの食事より、主体的な行動である点で生理的条件にかなう。更に食事時の読書は団欒を刺激する。

二宮金次郎の銅像の姿を、交通安全のための反面教師として援用することが定着してから久しい。しかしこの発達した車社会の中であればこそ、歩行と読書の結合が見直されるべきではないか。歩行―思索―読書、この三拍子は意外に読書環境の原点なのではないか。ホモサピエンスの後肢直立歩行が、50万年もの間その脳髄を刺激し続けた結果、巧緻極まる脳脊髄細胞シナプスの構造形成に寄与するところ大なるものがあった。足裏から脳中枢に与えるするどい刺激は、臀部全体に広がるあいまいな圧力に優る。諸君車を捨て、バイクを捨てて歩こうではないか。アナクロだと言われてもいい、片手に文庫本でも持って、自分の心臓の鼓動にマッチしたリズミカルな読書を楽しもうではないか、静大構内で逍遙学派を気取る人間が堂々とぶらつける位に、構内の交通事情が良くなっている筈なのだから。

現代生活は乗物を利用した日周運動と切りはなせない。そこでバス・電車内での読書を推奨する。但しバスの振動は眼に良いことはないから、必ず書物を持つ腕を宙に浮かせて視線が同調振動するよう極力工夫する。乗り越しに注意は必要だが大谷行きは避ければいいし、筆者の経験では案外熱中していても気付くものだ。問題は何を読むかである。乗物の中では新聞か週刊誌と相場が決まっていて、乗ったとたん置土産はないかと網棚の上をきょときょと眺めまわすけちも居る。こんなことにならないようにあらかじめ読むべき本は決めておく。短編がいいだろう。古くはマルクス・アウレリウス「自省録」、旧約の詩篇・箴言、モンテーニュ，パスカル等はどうだろうか。道中長ければ更に長篇を読むのに絶好、ギリシャ悲・喜劇全集（人文書院）は筆者にとって東横線列車内の人いきれと切りはなせない、終列車桜木町終点で横浜まで歩き午前様と相成った悲喜劇も交えて。静岡に移住して以来この点大いに不便している。

家を新築した先輩が居た。便所を特大の洋式とした。そこに適当な高さの書架を設け、アウグスチヌスをずらりと並べた。何年かかかって読了した。断っておくが彼は便秘症ではない。こんなことは凡人に実行不可能な贅沢といえるが、便所で何が読めるか、これは真面目に検討する価値がある。睡眠学習というのがある。時間にせこい筆者もこれには眉睡、眠る時ぐらい読書から完全に解放されるべきだ。

読書は人を連帯させる。ユダヤ人の「旧約」聖書、アラブにおけるコーラン、ルター訳聖書と宗教改革、「共産党宣言」とインターナショナル等々枚挙に遑なしだけれども、小は読書会から大は共同体の中での読書まで、交わりの中での読書の意義に注意を換起したい。ささやかなことだが、図書館で借りた本を一読後、貸出し名簿の中に友人知人の名前を発見する時のほのぼのとした後味は、何もかも自分の座右の書にせねば納まらない持てる者にはわからない趣味である。図書館に読書を通じた交わりの場所としての機能を持たせよう。

次頁下欄へつづく

〈図書館利用ガイドコーナー　5〉

図書館資料の受入れについて

図書館業務を一つのサービス・システムとして考えた場合、利用者に対する直接的サービスを担当するのが、貸出・レファレンス等の閲覧業務であり、背後でこれを支える間接的サービスを受持っているのが、受入・分類・目録等の整理業務である。選択された資料が、利用できる状態に準備する段階が、整理業務の範囲であるが、その最初の部分である受入について案内したい。

〈受入業務とは〉

購入・寄贈・その他の方法で取得した資料を、物品管理法（国における物品の取得・保管・供用及び処分に関する基本的事項を規定）に従って、国の財産として登録することと、不用決定をされた資料の除籍に関することを取扱うが、この間、全学資料の予算管理、図書館備付資料の年間購入計画案の作成、資料の登録・除籍にかかわる諸手続などを行う会計上必要な業務である。

納入資料には、図書や製本済雑誌のように、図書原簿に登録される**備品**扱いのものと、**消耗品**扱いされる未製本雑誌、新聞、長期保存を必要としない低価格図書などがあるが、今回はこれらの資料を受入れる場合の手続きにしぼって、購入、寄贈別（その他の手続は省略）に概略を述べたい。

〈購入する場合〉

購入は、資料受入れの最も一般的な方法である。発注から支払いに至るまでの手続きは、前記会計の規定に従って行われる。事務処理は必要最小限度に止め、利用者からの迅速処理の要望に応えるべく努力しているが、現状は限界の状態となっている。以下、資料別の購入プロセスと所要時間を併記したので、購入の場合の参考にされたい。

1．研究用資料

〈図書〉

①物品請求書を和書、洋書担当別に受理→②重点的重複チェック→③発注→④検収（納品）→⑤支払手続→⑥登録…（分類、目録担当の整理係へ回送、**所要時間**＝①～③（1～2日）、③～④（和書7～20日　洋書　国内在庫10～20日　海外発注国によって異なるが、2カ月～1年近くかかることがある）④～⑥（10～20日）。

洋書は国内取次店に発注し納品される。価格は銀行レートより15～20％ぐらい高くなっている。

〈逐次刊行物〉

1）外国雑誌・新聞等

①物品請求書を雑誌担当で受理（前年9月）→②仮発注（前年10月）→③契約（4月）→④前金払（5月）→⑤精算・支払手続（翌年3月）→製本（8月）。

外国雑誌は、国内取次店と契約するが、4月から翌年3月までの会計年度内に、海外出版元より随時、直接に図書館へ送付され、納品チェック後、蔵書印捺印の上、請求者に貸出されるか、閲覧室に配架される。また、契約時の価格は、前年の10月1日から15日までの平均実勢レートに、適切な業者マージンを上乗せしたものであるか、ほぼ全国共通的率に上る係数方式によって算出され、外国図書より若干割高となっている。

2）和雑誌等については省略。

2．学生用資料

学生の学習と研究に必要な資料を、年3回、全学教官と図書館が推薦し、学生用図書選定委員会がその中から選定するものと、学生から提出される購入希望図書申込書（1冊5,000円以内）の中から図書館側選定委員によって選定されるものがある。購入手続等は前記と同様のため以下省略。

3．図書館備付資料

基本的参考図書（事辞典・書誌・年鑑白書の類）、新聞、雑誌などであるが、年度当初、年間購入計画案を作成して、東部図書館委員会の承認を得て購入されるものである。

〈寄贈を受ける場合〉

一方的に贈られてくるものと、寄贈依頼を出して受けるものがあるが、前者については、本学の研究と教育にとって必要な資料が選択され、後者と共に購入資料と同様に取得し登録される。

以上、主な手続きについて述べたが、最後に、スムーズな受入処理のため、**校費で資料を購入する場合、必ず物品請求書（受入係に所定カードあり）に、日付を除く所定事項を記入の上、捺印して係へご提出頂くことと、市販されていない資料については、発行所の住所と電話番号を備考欄に記入して頂くことをお願いしたい。**

※前ページより

最後に妙な表現かも知れないが、読書環境を経験空間の中へ入籠にすることをお奨めしたい。早い話が実験書・楽譜のようなノウハウ式の書物は、このことがなくてはほとんど意味もなく興味もわかない。シェイクスピアの詩劇の理解は、読む・観る・演ずるの順序で格段の差を生ずる。同様な事態は読書一般、特に人生の方向を左右するような読書について、はっきりと現れるのではないだろうか。　（理学部・生化学）

（本文中に引用されている図書は本館に所蔵）

■図書館委員会報告

昭和58年度　第2回　S 58. 5 .23

1．昭和58年度図書館運営費予算案について審議し、これを了承した。なおこの予算案を委員会案として、部局で更に検討願うこととした。

2．その他

(1)　昭和58年度指定図書購入費分担額について審議し、これを了承した。

(2)　昭和58年度学生用図書購入費の配分について審議し、これを了承した。

昭和58年度　第3回　S 58. 6 . 7

1．昭和58年度図書館運営費予算案について、各部局における検討結果の報告のあと、審議し、原案どおり予算配分委員会に提出することを了承した。

2．その他

(1)　外国雑誌購入費予算の推移と今後の見通しについて、報告があった。

(2)　5月25日の評議会において、次期館長（7月1日付け）に、工学部の大月卓郎分館長が決定された旨、報告があった。

昭和57年度図書館統計

◎利用統計

(1)　貸出・閲覧（学部別）

区分			利用対象者数	閲覧（冊数） 出納	貸出（冊数） 開架	貸出（冊数） 出納	貸出（冊数） 合計
学生	学部	人文	678	5,403	7,769	2,631	10,400
		教育	1,030	2,665	10,079	1,538	11,617
		理	367	244	6,058	170	6,228
		農	281	44	1,193	14	1,207
	教養	人文	717	503	3,172	319	3,491
		教育	1,036	820	4,193	428	4,621
		理	418	140	2,677	99	2,776
		農	323	95	973	33	1,006
		工	1,005	145	2,617	73	2,690
	院生等		225	703	1,273	460	1,733
	小計		6,080	10,762	40,004	5,765	45,769
教職員	教官（職員）		434 (355)	—	346	8,128	8,474
	研究室		—	—	—	9,789	9,789
	小計		789		346	17,917	18,263
学外者			—	372	—	—	—
合計			6,869	11,134	40,350	23,682	64,032

(2)　貸出・閲覧（学生・分類別）　（冊数）

区分	本館 閲覧 出納	本館 貸出 開架	本館 貸出 出納	本館 貸出 合計	分館 貸出
0 総記	170	380	73	453	124
1 哲学	364	2,210	450	2,660	16
2 歴史	1,083	2,277	795	3,072	31
3 社会	1,718	10,217	1,854	12,071	76
4 自然	264	12,902	307	13,209	3,031
5 工学	183	2,172	132	2,304	4,778
6 産業	260	1,067	172	1,239	9
7 芸術	143	1,940	153	2,093	38
8 語学	627	1,379	632	2,011	18
9 文学	1,761	5,460	1,197	6,657	60
雑誌	4,561	—	—	—	778
合計	11,134	40,004	5,765	45,769	8,959

(3)　文献複写統計

区分		本館 人数	本館 件数	本館 枚数	浜松分館 人数	浜松分館 件数	浜松分館 枚数
依頼	学生	517	579	4,236	346	835	6,366
	教官	1,568	1,601	17,603			
受託	学内	2,104	3,234	18,483	96	186	1,270
	学外	844	958	9,102	303	421	3,002

外国への文献複写依頼（本館）

区分	件数	枚（コマ）数
学生	3	18
教官	205	5,064
合計	208	5,082

相互貸借冊数

区分	本館	浜松分館
貸出	10	1
借用	140	9

◎増加図書統計

（　）内は昭和57年度末の累計

	本館 和漢書	本館 洋書	本館 計	浜松分館 和漢書	浜松分館 洋書	浜松分館 計
0 総記	796 (30,049)	230 (7,874)	1,026 (37,923)	61 (3,232)	13 (792)	74 (4,024)
1 哲学	962 (19,297)	680 (11,593)	1,642 (30,890)	20 (2,895)	30 (510)	50 (3,405)
2 歴史	1,686 (35,956)	397 (6,521)	2,083 (42,477)	18 (1,582)	0 (212)	18 (1,794)
3 社会	7,226 (103,457)	2,563 (29,136)	9,789 (132,593)	38 (3,278)	1 (424)	39 (3,702)
4 自然	2,200 (50,168)	2,829 (41,107)	5,029 (91,275)	764 (20,690)	1,065 (24,327)	1,829 (45,017)
5 工学	1,315 (17,507)	234 (2,672)	1,549 (20,179)	1,174 (28,981)	572 (18,152)	1,746 (47,133)
6 産業	1,500 (29,971)	287 (5,837)	1,787 (35,808)	7 (590)	1 (22)	8 (612)
7 芸術	620 (14,870)	120 (2,411)	740 (17,281)	59 (1,678)	3 (272)	62 (1,950)
8 語学	705 (13,521)	410 (8,594)	1,115 (22,115)	56 (2,923)	26 (2,083)	82 (5,006)
9 文学	2,094 (42,510)	1,534 (27,647)	3,628 (70,157)	1 (3,580)	0 (822)	1 (4.402)
計	19,104 (357,306)	9,284 (143,392)	28,388 (500,698)	2,198 (69,429)	1,711 (47,616)	3,909 (117,045)

■人事異動

新任（58. 7 . 1付）

大月卓郎　館　長（工学部・教授）

退任（58. 6 .30付）

細井寅三　館　長（農学部・教授）

新任（58・7・1付）

藤田郁夫　分館長（工学部・教授）

退任（58. 7 . 1付）

大月卓郎　分館長（工学部・教授）

静岡大学附属図書館報「図書館通信」　第14巻第2号（通巻65号）　1983年10月15日発行
発行所　静岡大学附属図書館　静岡市大谷836　TEL（37）1111
印刷所　黒船印刷　静岡市登呂二丁目10―8　TEL（86）0236